

(キャラクター)

●蛇ノ目 蓮弥

蛇ノ目組、若頭。モデル顔負けの美形。

マツチングアプリーで出会うが、その正体は…？

あなたのことが「昔から」好き。

●あなた

一見ごく普通の会社員だが、実は父が一千万の借金を残し蒸発。

代わりに借金を返すため、パパ活に手を出すことを決意。そこで知り合った蓮弥に振り回されることに。

あなたと彼の間には、忘れていた「何か」があるようで――。

（あらずじ）

失踪した父の莫大な借金を返しながら、日々懸命に働くあなた。しかし、どうしてもお金の工面が難しくなりマッチングアプリでパパ活をすることに。

そこにやってきたのは、顔もスタイルもいいモデル顔負けの男。

出会いに困っていなさそうな彼の容姿と立ち振る舞いに、最初は警戒するあなただったが……

こちらを気遣いながらときにあざとく、憎めない彼にしだいに心が解かれていく。

パパ活をはじめた理由を蓮弥に尋ねられ、自身の境遇を話すあなた。すると蓮弥は優しい顔で話を聞いてくれて。

「……まだ、帰したくないって言ったら困る？」

初めて過去の痛みを受け入れてもらったあなたは、蓮弥と体を重ねてしまう。

けれど、ホテルから出たところで待っていたのは、蓮弥を『カシラ』と呼ぶいかつい男たち。なんと彼は、蛇ノ目組の若頭だった……！

それは父がお金を借りているヤクザの組。

騙されたことに傷つき、怒るあなた。せめてもの抵抗で蓮弥の首元に噛みついたら……!?

「女の子に噛み跡つけられちゃった……♡」

変態な蓮弥はあなたを気に入り、借金帳消しの代わりに自分の愛人になるよう交換条件を出す。

選ぶ道のないあなたは、その契約を呑むほかなくて……

変態で絶倫なヤクザに執着され、翻弄されていくしかない。

【トラック1】

タイトル…出会いは突然

4
場所…高級ホテル前（夜）

※待ち合わせ場所にやってくる蓮弥。

「……ようやく見つけた。思った通り、綺麗な髪だ」

※振り返る主人公。

「こんにちは、君……だよ……？
待たせちゃってごめんね。」

「あれ……どうかした？ ひょっとして断ろうか悩んでる？
……うーん、まいったなあ……」

「実は僕、つい最近彼女に振られたばかりなんだ。」

「1人でのんびりするのも寂しいから、
気晴らしでマッティングアプリに登録したんだけど……。
君以外の女の子はピンとこなくて」

「だから今回だけでいい。』どうしても『君がよくて」

「お金なら倍払うからさ。僕とデートしてくれる？」

※主人公「1日だけですよ……」

「ふふ、ありがとう！ ちょっと近くのレストランを予約してあるんだ。」

「（クスツと笑って）あ、そうそう。僕の場合は蓮弥って呼んで。
下の名前で呼んでもらった方が、ほら、デートっぽいじゃない？
……ふふ、それじゃ行こうか」

「うん？」

「え？ ……君を、次の恋人の、……練習台に？」

「ふふ……ああ、ごめんね。笑ったりして。嬉しくてつい」

「お金のためとはいえ、僕の愚痴も相談も聞いてくれるんだ？
すごく親身になってくれるんだなって……優しいんだね。」

「じゃあ、相談に乗ってもらおうかな。もちろん、君の話も聞かせてもらうよ」

場所…レストラン（夜）

※レストランで食事する二人。

「ね？ なかなか美味しいでしょ？

デザートも来たけど……お腹いっぱいになったかな？

アラカルトで追加もできるよ」

※主人公「いえ、充分です」

「（微笑んで）そう、それならよかった。

食事も終わったところで……少しだけ話をしてもいいかな」

※食事の手を止める蓮弥。

「いきなりこんなこと聞くのは失礼かなと思ったんだけど。

……どうしてお金が必要なのかな？

君は散財するタイプには見えないし、しっかりしてる」

「こういうことをするのは、今回が初めてだって言ってたよね？

それにかなりためらっているようだったし。

そこまでして、お金が必要だなんて……何か家庭に問題があった、とか？」

※主人公「それは……」

「僕は君の力になりたいんだ。教えてもらえると、嬉しい。」

※主人公「……10年前、父が借金をしてしまって」

「そうか……お父さんの借金を、どうして君が？」

※主人公「……取り立てに耐えられず父は姿を消しました」

「なるほど。

お父さんがいなくなってしまったから、君が借金の肩代わりをしているわけか」

※主人公「すみません。暴力団がらみなんて言われたら困りますよね――」

「いいや、謝る必要はないよ。」

「……君は優しく強い子だ。」

今どこかで暮らしているお父さんも、亡くなったお母さんも、
頑張っている君のことを誇りに思っているはずだよ。

……大変だったね。」

「君の今までの苦労は、僕じゃ全てをわかってあげられないかもしれない。
でも、君の今の苦しい気持ちは、少しでも溶かしてあげたい。」

「……僕が、まだ、帰したくないって言ったら……困る？」

君が僕ともう少しだけ一緒にいても良いと思ってくれたなら、この手を取って」

※頷き、手を握る主人公。

「ありがとう……それじゃ、場所を変えようか」

【トラック2】

タイトル…初めての夜

4

場所…ホテル部屋内（夜）

※ホテルの部屋の中に入る二人。

「ん……緊張してる？」

「……おいで」

※ヒロインを抱きしめ、服を脱がせる

「恥ずかしがることないのに。すごく綺麗だよ」

「（耳元で囁く）やっぱり君を引き止めてよかった……
あのまま君を帰していたら、
僕は今夜ずっと悶々としてただろうから。」

「（首筋にキス）ちゅっ（肩にキス）ちゅっ。ちゅっ。（腕にキス）ちゅっちゅ。
（胸にキス）ちゅっ。ふーっ。すべすべだね。
それに肌が火照ってピンク色になってるよ。
お酒、そんなに強くないんだ？
飲ませ過ぎちゃったかな」

「ほら、胸の先っぽまでピンク色……」

「どこにキスしても、どこを舐めても甘い……。
かわいい……はぁ、恥ずかしがらなくてもいいんだよ。
さっきの食事と変わらないんだから。
見なくていいの？ 先っぽ舐め回してるところ……ちゅ、れろれろっ。ちゅぷ」

※主人公「恥ずかしい、から……」

「そう？ ふふ、恥ずかしいかぁ。
あれ？ ふらついちゃってる……ふふ、うん、いいよ。力抜いて。
このまま——。」

※ベッドに仰向けに倒される主人公。覆い被さる蓮弥。

「ん…大丈夫。僕に任せて。」

※主人公の性器に触れる水音・継続

「すごい濡れてる…聞こえる？ くちゅくちゅって。」

※主人公「んっ♡」

「(クスツと笑う)へえ、気持ちいいとそういう顔するんだ？
可愛い。もっとしてあげたくなっちゃうな」

※ヒロインにキスをしようとぐいっと寄る

※主人公「ま、待って！ 付き合っていない人とキスはちよつと」

「(しゅんとして)え…キスはダメ？ 付き合っていないから？
んん、わかったよ…。」

「(笑顔で)それじゃ一度だけ♡ ね？」

「ちゅっ…あはは、怒った顔しないで？ ごめんごめん。」

「(耳元で囁く)じゃあ、今日はうしろからにしようか。
その可愛い顔見たら、またキスしたくなっちゃうから…」

※四つん這いになる主人公。

※ベルトを外し性器を出す蓮弥。

※避妊具をつける蓮弥。

「うん…挿れるよ。」

※バックで挿入する蓮弥。

「ん…」

※腰を進め、奥に押し付ける蓮弥。

「…んっ」

「はあっ、ふふ、いい声…」

あーあ…。

一番奥に押し付けただけでイッちゃったね♡」

「ほら、逃げないで……ここがいいんでしょっ♡」

「っはは……」

「はーっ、はーっ、
奥でいじめるとすっごく気持ち良さそうだね。
いつもこうなの？」

※首を振る主人公。

「へえ、違うんだあ……」

「それなら僕たち、すごく相性がいいんだね♡」

「ああ、だめだめ。今こっち向いたらキスしちゃうよ？
必死になってる顔、可愛いんだもん」

「はっ、はあっ、腰掴まれて上乗られちゃったら、体動かせないね？
このままもっと気持ちいいとこまで連れて行ってあげるから……！」

「ああ、いい声……！ はあっ、はっ、煽るなあ……。
今の君にキスできないの、ちよつと残念だなあ……。
その、甘い声聞いていると、今どんな顔なんだろうって想像して……
たまらない気持ちになるよ」

「はあ、ああ、ナカ、ビクビクしてるよ。
かわいい……」

「んんうっ、また締まってきた……イきそうなの？
はあ、いいよ。好きなだけイッて……！」

※絶頂する主人公。

「くっ……はあ、すっご、締まるっ……はあ、ああっ、僕も出ちやいそ……
はあっ、あっ、イク……出るっ、出るっ……！
ん、くっ、うううっ！」

※射精する蓮弥。

「ふーっ、ん、気持ち良すぎ……反応が可愛くて、夢中になっちゃったよ。
トロトロになってる隙狙って、無理やり抑え込んでキスしちゃえばよかったな。
はは、君も余裕なくて拒めないだろうし……ねえ、もう一回——」

※帰り支度を始める主人公。

「ははは、つれないなあ。

そういうところがかわいいんだけどさ。」

「えっ、てか、もう帰っちゃうの？ 残念だなあ。体は大丈夫？
もう少しゆっくり休んでいけばいいのに。」

※主人公「帰ります……」

「わかったよ。じゃあ、出ようか。

そんなに警戒されちゃうと悲しいなあ……
強引にキスしちゃうって、冗談だよ？♡」

16

場所…ホテル外（夜）

「家まで送るよ。タクシー呼ぼうか？」

※主人公「いえ、おかまいなく……」

「そう？ でも——」

※目の前に黒塗りの車が止まり、ドアを開けて男たちが降りてくる。

「ああ、ごめんね。お迎えが来ちゃった」

「その顔……僕が何者か気づいたみたいだね。

無理ないかあ。黒塗りの高級車と、ガラの悪そうな男たち、っていう、
テンプレみたいな要素が並んじやったらねえ（笑）」

「君の想像は、大正解だよ。でも、まだ一番大事なことに気づいてない——」

「君の父親は、8年前に失踪。

借用書の保証人には、娘……君の名前が書かれてる。」

「そして……支払期日は一ヶ月後。貸した金額は、一千万円」

「君がお父さんの代わりに背負った借金。

その債権先は——僕の組だよ」

※主人公「最初から騙してたってこと!？」

「騙すなんて人間きが悪い。」恋人の練習台になる」って言ったのは君だろ？」

「楽しい退屈しのぎになったよ。残りの返済も頑張ってるね」

※駆け寄り、蓮弥の首筋に噛みつく主人公。

「（痛みを感じ）っ……………!」

「（周りに鋭く）待て。余計なことするなよ」

「あはは、想像以上だなあ。待った甲斐があったよ……
ふっ…………ふふふ…………はあ、すごくいいね……」

「女の子に噛み跡つけられちゃった……♡」

「僕に一撃食らわせたのに、どうして泣いてるの？
その泣き顔を見ると、背筋がたまらなくゾクゾクする。
もっと僕を憎んで恨んで……」

君の美しい心に、一生消えない傷を擦り込みたい」

「そうだ、いいことを考えた。」

——一千万の借金は帳消しにしてあげる。」

「その代わり——」

「君が僕の愛人になったら、ね？」

「悪い話じゃないだろ？」

君のお父さんが借りたお金くらい、僕ならどうにでもできる。

だって、その借金の債権先である……蛇ノ目組じゃのめぐみの若頭は、この僕だからね。
期間は一年でかまわない。僕の要望に応えてくれさえすれば……」

※主人公「ふざけたこと言わないで」

「ふざけたことは言っていない。僕は真面目だ。」

「悪い話ばかりじゃないさ。身内に人探しのプロがいるんだ。
僕と手を組めば、お父さんにまた会えるかもしれないよ」

「一晩考える時間をあげよう。

どうするかは、君次第。いい答えを期待してるよ」

「じゃあね、今日は楽しかったよ。またね♡」

【トラック3】

タイトル…愛人契約

4

場所…蓮弥自宅（夜）

※蓮弥の元を訪ねた主人公。ドアを開け、迎え入れる蓮弥。

「こんにちは。また会えて嬉しいよ。どうぞ、入って」

※部屋の中に入る主人公。

※主人公「私は何人目か知らないけど……わざわざ私を愛人にするなんて」

「何人目？ 何言ってるの。」

※ヒロインを壁際に追いやりながら壁ドン

「これだけは、覚えておいて——」

「……僕の愛人は、あとにも先にも君だけだよ。ちゅっ……」

※主人公「そういうのいいですから」

「君もすっごく気持ち良さそうだったしね？
可愛い反応してくれて、男冥利に尽きるよ♡」

※主人公「あれはお酒が入ってたから……！」

「へえ、お酒が入ってたから、ね……。
それじゃあ今日はどんな顔を見せてくれるのか、楽しみだな。」

「服、ここで脱いじゃおっか！ もういらないもんね？」

「愛人として、僕の要望に応えてくれるんでしょう？
でも、そうやってためらってくれたほうが僕はドキドキできるけどね」

※耳舐めをしながら主人公の服を脱がせる蓮弥。

「ふふ、身体が熱いね……さっきまでの強気な姿勢はどうしちゃったの？
気持ちよさそうにしてたのはお酒のせいじゃなかったっけ？」

「はあ、舌、逃げないで。
ん……よくできました♡ じゃ、下着も全部脱ごうか」

※ベッドにそのまま押し倒される。同時にうつぶせになる主人公。

「へえ……ささやかな抵抗だね。
うつぶせになっただけで、逃げたつもり？」

「ちゅっ……あ、そっか。キスされないようにしてるんだ？
けどその分、何されるかわかんなくてドキドキしない？
ほら、うしろから手まわして、おっぱい触り放題だし？
君はそういうプレイが興奮する、エッチな子なのかなー。」

「だって、乳首固くなってるよ？ほら……
キュって摘まんだらどうなっちゃうの？ 知りたいな…♡」

※反応する主人公。

「ああ、ビクビクしてる♡ やらし……ね、顔見せてよ。
口押さえて、声我慢して……今すっごいエッチな顔してるんでしょ？
……なに、やなの？」

「すでに一回抱かれてるんだから、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに」

「別にいいけどね？ 抵抗もされないし……ここも触っていいってことだ。」

※耳なめをしながら主人公の性器に指を入れかき回す蓮弥。

「すっご、グチュグチュ音出てる。
聞こえる？ ほら、ほらほらほら……♡
浅いところも深いところも全部撫で回してあげるよ。
僕ね、こう見えてけっこうしつこいの。
あれ？「見た目通り」って顔してるね(笑)
いやいや、甘いよ。もっとだよ♡ こんな、ふうに、ねっ♡」

※絶頂する主人公

「うわ、えろ……。
まぐらに顔押し付けて我慢したんだあ？ 声が出ちゃうから？♡
ふふ、可愛い♡ だらしな声、上げちゃえばいいのに……」

「ここ、好きなんだね。ほら、ここ。あゝ、ぐっちゃぐちゃ。」

耳ゾクゾクさせながらここいじられるの、苦手だよねえ」（笑）
君がふうふう言いながら僕の指を締め付けてくれるだけで
たまらない気持ちになるよ。」

「ねえ、もしかしてだけどさ」

「声我慢して、反応薄くしたら、
僕が飽きるんじゃないかって思ってる？」

「頑張ってるどころ悪いけど。
僕はそういう態度のほうがそえられるんだってば」

※主人公「わかってるならさっさと終わらせて……！」

「終わらせて？」

「……それは困るなあ」

※服と下着を脱ぐ蓮弥。

「君に見せたら、どんな顔するのか楽しみにしてたんだよ？」

「僕の刺青」

「はは、やっぱりいいなあ。その怯えた顔。」

※主人公にのしかかる蓮弥。

「ほら、もっと目に焼き付けて」

「君はこれから、大っ嫌いなヤクザの男に抱かれるんだよ」

「いい子にすれば可愛がってあげる……」

「だけど……」

「もし裏切ればどうなるか、君はよく知ってるはずだ。」

※正常位で挿入する蓮弥。

「これで、逃げられなくなっちゃったねっ♡」

※奥までの挿入で絶頂する主人公。

「あれ？」

「ゆっくり入れたつもりなんだけどなあ……？」

「もしかしてちょっとイッちゃった？
相変わらず感度いいねえ」

※主人公「別に、イッてないし……」

「（満面の笑みで）イッてない？
……なあんだ♡」

「それならちゃんとお、イカせてあげないと……ねっ♡」

「ん、はあっ、……あ♡、それ……いいね。
何にも喋れなくなっちゃった？ 気持ちいによっわよわなんだねえ……」

「はっ、あっ、やば、すご（笑）
腰反らせちゃってさあ……、」

「お酒入ってたときより、もっとすごいことになっちゃってるけど？」

「ん、まだ好きじゃないなんて言うの？
つま先までピンって伸びちゃってるくせに……♡
はあっ、んうっ、君はそういう強がりなところ変わらないね。
そこが可愛いんだけど」

※主人公「私のこと、昔から知ってるような言い方しないでっ」

「ん、君のことは知ってるよ……ずっと前からね。
ヨダレたれてるのに、まだ睨む元気はあるんだあ♡
言ったでしょ、そういう態度……そそるって。
ゾクゾクしちゃうなあ」

※主人公「会ったこと、あるの？」

「ん？ さあ、どうかな……？ たとえ会ったことがあったとしても……
思い出さなくていいよ。
今の僕だけを見てもらえればいいから」

※主人公「それじゃわかんないっ」

「いいんだよ、わからなくて。今は気持ちいいことだけ考えて」

※主人公「気持ち良くなんか……ああっ♡」

「はぁ♡ 中すっごいビクビクしてる……」

またイツたんだ？ まったく……嘘つくなんて悪い子だ」

「僕とのエッチが好きなら素直になりなよ。

うんうん、顔はもうとろとろになっちゃったね、いいこいいこ。

口では強気で振る舞ってるけど、甘い声だって出ちゃってるじゃん。

まさか僕を喜ばすために演技で鳴いてくれるわけじゃないよね？

それじゃあやっぱり……気持ちよくて声が出ちゃってるってことだ(笑)」

「はぁ、はっ、ああ、トビそうになってる顔、かわいいーね♡
そろそろイキそうなんだ？」

「あゝゝ僕もう、イキそう……」。

はっ、はぁっ、出すよ……

一緒にいいこ……っ。

ああっ、はっ……んっ……イク……ッ(射精)」

※二人、絶頂する。

「はーっ、はぁ、ふっ……可愛い……まだへばるのは早いよ？
今日は僕らの記念日だから、いっぱい気持ちよくなろうね♡」

【トラック4】

タイトル…離さない

4

場所…公園（夜）

※ベンチに座っていた主人公の元へやってくる蓮弥。

「久しぶり。元気にしてた？」

連絡しても、いっつも忙しい、空いてないってつれない返事しか来ないから寂しかったよ。

今夜、君から連絡が来たから嬉しくて、仕事放り出してきちゃった。

僕を振り回すなんて、ほんと罪な女だね♡」

※主人公「あなたいったい何考えてるの！ 私の職場に告げ口するなんて！」

「ダメだった？」

毎日忙しそうだから、どんな会社で働いてるのかなーと思って、

ちよっと自己紹介したただけなんだけどな？

んゝ、カタギの世界のルールは難しいなあ

でも…君の予定がなかなか空かないから…

仕事を辞めれば僕とずっと一緒にいてくれるかなって。

ちよっと期待したのは、あるね。」

※主人公「おかげであなたの思った通りになったわよ！」

「へえ、会社辞めるんだ。

じゃあもっとたくさん会えるね？嬉しいなあ…！

そうだ、せっかく久しぶりに会えたんだから——」

※主人公「これ以上付きまとわれるなら、水商売でも何でもしてお金は返します！」

※手を叩く蓮弥。

「（にこやかなまま、声のトーンを変える）はい、そこまで……」

「君は僕を怒らせるのが上手だね。

水商売でもなんでもして借金を返す？ 手段も選ばずに？

君が？ へえ……」

「胸糞悪い想像させないでよ」

「お金なんてどうでもいい。せつかくここまできたのに。君にそんなことされたら、元も子もないじゃないか」

※主人公「え」

「タクシーを捕まえよう。
久しぶりに会えたんだ、まさかこのまま解散なんて言わないよね？
ふふ……今夜は長くなるよー」。

二
場所…タクシー内（夜）

※タクシーの後部座席に座る二人。

「……こんなに長い一ヶ月を過ごすのも、
女の子にお預けされたのも初めての経験だよ」

「それから——、」

「もう一度跡をつけてほしいなって。
消えちゃったから。また噛みついてくれる？
健気に待ち続けた僕に、ごほうびはくれないの？」

※主人公「キモッ」

「あははっ、キモいなんてひどいなあ。どう？　ごほうびくれる？」

※主人公「変態趣味以外なら考えますよ」

「えー、これは変態趣味じゃなくて、愛なのに。
ふふ、まあいいや。それじゃあ……」

「君の体をもらおうか……」

「待ちきれないなあ……
早く僕のもので、君のナカをゆ〜っくり押し広げて……♡
ぐちゃぐちゃにして、たっぷり、キスしようね……♡」

「君のナカが締まってきたら、
君が大好きな乳首も触ってあげる。
かわいい声、いっぱい聞かせてよ」

※主人公の腹部に手を当てる蓮弥。

「この辺でしょ？ この奥深くまで、僕のモノが挿入るんだよ。君は子宮の入り口が一番好きだから……いやらしい音が鳴るくらい、たくさん突いてあげたい♡」

「あれ？ もしかして思い出しちゃった？
耳まで真っ赤だ(笑) ……女の表情になってるよ？」

※主人公「ちが……変なこと言わないで！」

「(クスツと笑う) 怒った顔も可愛い♡
今日は優しくする余裕ないから。覚悟しててね」

※タクシーが止まる

「着いたよ……それじゃ、行こうか」

【トラック5】

タイトル…全部頂戴

4

場所…蓮弥自宅（夜）

※玄関に入る二人。

「エレベーターを待つ時間もどかしかったね」

※主人公に壁ドンする蓮弥。

「君だって、タクシーの中からうずうずしてたくせに。
こっち向いて」

※主人公の服を脱がせながらキスをする蓮弥

※靴を履いたままのため、適宜足音が挟まれる

※主人公「ちょっと待って……」

「待たない。

ん……舌出して。そう……」

「ん、ふうっ、僕に一ヶ月のお預けをしたらどうなっちゃうのか……
わからせてあげなくちゃいけないね」

「……あれ？」

「今日はフロントホックなんだね。

すごいエロいな……」

僕のため？」

※主人公「ち、違……」

「違う？ ……ふーん？

結果的に君の意図しない形で僕を興奮させちゃったけどね。」

※主人公のパンツと下着を下ろす蓮弥。

※主人公「ダメっ！ こんなところで。靴も脱いでないし」

「ん…ここじゃダメ？」

僕はダメじゃないよ。それに…

君は結構恥ずかしいことをされてるほうが興奮するタイプ、って僕は思ってるんだけど」

「ほら、もう足の力はいらなくなってきた。気をつけて？」

「今日はこのスーツで仕事してきたんでしょ？」

今日まで、お仕事よく頑張ったねえ…。

でも、もうこれに締め付けられる必要ないよ。

あとはもう全部、僕に任せて」

※主人公「あなたの思い通りになんか…っ」

※主人公の性器を愛撫し始める蓮弥。

「…そんなこと言ってさあ…」

説得力ないね。もうこんなに濡れてる。」

「君ってさ、いつも僕に強気な態度で、

『あなたの思い通りにはなりません』って顔してるのにな…」

「君も一か月間、我慢してたの？ こんなに濡らして――。

(クスクス笑いながら) 流石にこんなにくちゅくちゅにさせながら、僕と手を切りたいってのは無理があるんじゃない？(笑)」

「はあ、あーあ、指二本も入っちゃった。」

「君のだあいすきなココを、ぐっちゅぐちゅにされながら、

このかわいい耳も舐めたら…

どんな顔を見せてくれるのか、気になるな。」

「ああ、ビクビクって体跳ねた。

今、甘イキしちゃった？ ふー、可愛い」

「ダメダメって言って抵抗して、嫌なフリしたって意味ないよ？

もう、僕の手のひらぐしょ濡れだよ」

※自分のズボンと下着を軽く下ろす蓮弥。

「おかげで、もーきつくてしうがなかったよ… んっ」

「ん、ふっ…はあ、ごめんごめん。」

はあ……反応見てたらたまらなくなつて。
ちよつと無理やり入れちゃった♡」

「(ゾクゾクしたように) ああ~~~~……。その顔、最高♡」

「ん、あああつ……。この感じ……。ずっと味わいたかったよ。
久しぶりだから……。っ、余計に気持ちいいでしょ？」

「ああ、この体勢……。深くまで届いちゃうよねえ。
ん、腰ちよつと突き出すだけでっ、君の好きなどに当たっちゃうね
ふーっ、ふーっ……。んっ、ほらっ、ここだよねっ♡」

※主人公「んっ♡ ひあっ♡ ああっ♡」

「はあっ、あつ、はあっ、すごい声っ。ここ、玄関なのがいいの？
えっちな声、そんなに出して……。
もし聞こえちゃてったら、ご近所さんたちに大サービスだね？」

「なんて……。冗談だよ。防音もしっかりしてるから、外に音は漏れない。
君が声出しながらした方が気持ちよくなれるんなら、
思いつきり出しちゃえばいいよ……。
僕としてはっ、歯食いしばって声堪えてる顔も大好きだけどっ♡」

「あゝあゝ、腰動いちゃってるよ。はあ、ああ、エロ……。
そうそう、これくらい激しいのが好きなんだもんね？」

「うん、いいよ……。
君が気持ちよくなるためなら……はあっ、なーんでもしてあげたい♡
……ん、ん……。キツ……。
はは、そんなにしめたらやばいよ。もしかしてもうイキそうなの？ ん？」

「その顔……。凶星だった？」

「だーめ。一緒にイクまで我慢して。」

「君はもう僕以外の男じゃ満足できないよ……」

「この一ヶ月、どこで何をしていても、
ずっと僕のことばかり考えてたでしょ？」

「ふふ……。ほらね、思った通りだ。
ただの『いい人』じゃすぐ忘れられる。」

だから君に一番恨まれる状況を選んで、愛して、突き放した」

「反吐が出るほど嫌いな男だってわかってるのに
体は疼いてしょうがない。」

頭がおかしくなりそうなくらい刺激的だろう？」

「ん、あっ♡ はあっ、中、キュンキュン締まってる……♡
ふーっ、……なあに、動いてほしいの？」

おねだりするならそこじゃなくて口で言ってよ(笑)」

※苛立ち、ネクタイを掴んで引き寄せ自らキスする主人公。

「ん、ちゅ、んんっ、君からキスしてくれるなんて……」

※主人公「なんでも思い通りになると思ったら大間違いよ！ このド変態！」

「……え？ 急にチューしてきたと思ったら……」

……なに、『ド変態』？

……ぼくが？

もしかして、怒ってる？ キスしたのはその仕返しってこと？」

「(ゾクゾクしながら)ふ、ふふ……ふふふ、

あはっ、それ、最ッ高……♡」

※主人公「あああっ♡」

「ん、ふうっ♡いきなり突き上げられてびっくりしちゃった？

おっきい声出ちゃったね♡

今度は僕がキスで黙らせてあげようか？」

「なあんて、そんな勿体ないことしないけど♡」

「ああ……僕もそろそろ限界かもっ。ん、はあっ。

はっ、はあ、君の可愛い声でイカせて……っ。」

※主人公「イク、イク……ん、あっ、だめえっ」

「はあ、はっ、あゝ、やば…… あっ、

ん、くっ♡ イク……っ、んうっ……!」

※二人、絶頂する。

「…………っ、ふうー……………」。

※しやがみ込む主人公。

「ああ、疲れちゃったの？ 大丈夫？

あれ、これで終わりだと思ってる？

まだだよ。一ヶ月分のツケは、ちゃんと返してもらおうからね♡」

【トラック6】

タイトル…本音

4

場所…蓮弥自宅（朝）

※翌朝。目を覚ます主人公。蓮弥が主人公の足にキスしている。

「ちゅっ……あ、起きた♡ おはよ。

ゆうべは散々可愛がっちゃったから、疲れた？ よく眠ってたね……」

※主人公「何してんのよ!？」

「えゝ？ だって昨日、ハイヒール履かせたままドタバタさせちゃったからさ、靴擦れとかしてないかなって気になっちゃって？」

「ちゅっ……」

引越したばかりで、湿布も絆創膏も用意がなかったから
ちゅっ……ん、ちゅっ、ちゅっ。

代わりにキスして僕が治してあげようかなって」

※主人公「そんな際どいところ怪我してない!」

「ん、ここは疲れてない？ そうかな」

「言っておくけど。僕、結構上手いよ？」

「（クスッと笑って）試してみる？」

※下着の上から主人公の性器を愛撫する蓮弥。

「あれ？ 寝起きなのにパンツ濡れてる？ ……ふふ」

「ふーっ……」

※主人公「ひあっ!？」

「あはは、いい声♡♡

ああ、ごめんって、さわって欲しそうにしてたから？ つい。」

「あーあ、大事なところこんなに硬くしちゃって……」

ほら、ぶっくりしてる。下着の上からも丸わかりだよ。」

「はぁ…下着汚したらかわいそうだから、脱いじゃおっか…」

「あー、ははは♡すごい、真っピンクに充血してたんだ…♡」

※主人公「あぁっ、待ってっ♡」

「ん、奥も欲しいの？」

切なそうな顔してるもんね。

指、入れてあげるから力抜いて」

※主人公の性器に指を挿入する蓮弥。

「ん、はぁ…中、熱くなってる…感じる？」

きゅーって締め付けてきてる。

昨日散々奥まで突き上げたのに。

まだまだ欲しいってこと？ 欲張りだね…」

「ん、はぁ、声我慢しなくてもいいよ。可愛い声聞かせて。

かき回しながら、クリも舐めてあげる♡」

「あー、腰ガクガク浮いてきた♡

気持ちいいの逃がそうしてるの？

でもそれじゃ、腰突き上げる度に、逆に僕の口に擦りつけちゃうよ？」

「ふーっ、ふーっ、気持ちいいね？」

感じすぎて、クリだけじゃなくて乳首までツンって勃起してる。

エロい姿見せられたら、僕だって我慢できなくなっちゃうなあ♡」

※主人公、絶頂する。

「ん、ははは、…すっご。

イッチやったね…君の声聞いてたら、ほら、

僕のもうこんなになっちゃった…」

「ほしい？」

※主人公「や、だぁ、待って」

「今自分がどんな顔してるのかわかってる？」

泣きそうな顔して、唇震わせて…『入れて』って言ってるのと同じでしょ？

そんな顔されて、僕がおとなしく待てるかどうか……
君が一番よく知ってるんじゃないの？」

※ズボンと下着を脱ぎ捨てる蓮弥。

「ああ、ごめんね、僕『待て』できないの。」

※正常位で挿入する蓮弥。

「ん、くっ……思ってた通り、中熱くてとろけそ
ふーっ、あ、ねえ、また入れただけでイッちゃったの？
体のけ反らせちゃって……ホント可愛い。
大丈夫、恥ずかしがらないで。僕しか見てないんだから。」

「腰掴んで、奥まで突き上げてあげるねっ。
はあ、はっ、君の大好きな子宮の入り口も……んっ、
はあっ、ああ、んあっ♡可愛い……
またつま先ピンって伸びちゃってるの？ 足、つつちゃうよ？
体ビクビク止められないか……」

「ん、口開けてどうしたの？ チューしてほしいってこと？
おねだりしてほしいな♡
『チューして』って、可愛い声で言ってみてよ♡」

※主人公「や、だあっ」

「やだ？ 残念。じゃあ僕からキスさせてもらっちゃおうかなあ」

「んっ、ちゅ、ちゅく、ちゅぷ、じゅるるるっ。
思いつき唇に噛みついてくれてもいいのに。
ちゅく、ちゅ、ちゅ、じゅるるるっ。ちゅく。んんっ」

「はあ、ふっ、キスただけで中すっごい締まってる……
僕のを根元から先っぽまで、抱きしめて締め付けてるよ。
早く中に出してって言われてるみたいで嬉しくなっちゃうな」

「はあ、はあっ、ああっ♡ 目の前チカチカしてる？
顔、必死だからすぐわかった。
気絶しちゃいそうなくらい気持ち良くなってくれてるんだね。
嬉しいよっ……はあ、君の余裕ない顔見る度にゾクゾクする……!!」

※主人公「なんでっ……」

「なんでかなあ？」

でも、君が気持ち良さに流されてわけわかんなくなってる顔も好きだしっ。
悔しそうに、涙一杯ためてる顔も大好き♡

それにねっ、こうやって奥集中狙いされて、

腰ビクビクさせながら体のけ反らせてる姿も超好きなんだあ♡

僕の腕の中で、君がとろけそうになってるのを見ると

たまらない気分になるよ♡

抑えきれないくらい、興奮する……！」

「はあ、ふっ……君のこと、体の中全部確かめて愛して
骨抜きにしちやいたって思ってたのにっ。

結局僕のほうが夢中にされてるかもね……嘘じゃないよ。

僕のもの、君のナ力でビクビクって跳ねてるでしょ？

余裕ない証拠だよ……」

「はあ、ああっ、さっきからイキっぱなしだね♡

何度イッたかわからないでしょっ……ぐちゃぐちゃになってる……

中もうねって……もう限界って言ってくれてるみたいだね♡

もうイキそ？」

※主人公「ああっ♡ だめ、イク……♡」

「あゝ、今のイクって言葉、すっごいキタ……♡

もう一回聞かせてよっ……

何度も何度も聞きながらっ、何度も何度も中に出したいっ……！

はあ、ん、せり上がってきちゃった……一緒にイこっか」

「一番奥に擦りつけながら、ビクビク出してあげる……

どれだけ熱いのか、体の中で感じて？ はあ、ん、はっ、はっ、イクよ？」

※主人公「あ、や、だめ、だめっ」

「この期に及んでダメダメ言ったって、止められるわけないでしょっ。

はあ、ギユって抱きしめながらイこ。

はあっ、はっ、あ、イク……出る、出る出るっ！

ああっ、んっ、くっ……♡（射精）」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ……

はあ、はっ、まだ絞り出そうとしてくれるの？

可愛いね……僕は君のこと全力で愛して可愛がるよ」

「まいったね……君のためなら、どんなこともしてあげたくなっちゃうよ。
こんな気持ち、初めてだ」

※主人公「どうして……」

「どうしてだろうね、君が可愛いからかな？」

※主人公「蓮弥さんは、私を——」

「え？ 待って……」

今僕のこと名前で呼んでくれた？」

※主人公を抱きしめる蓮弥。

「僕の名前、やっと呼んでくれた」

「あの日以来、君が『蓮弥さん』って呼んでくれる日はもうないだろうって
思ってたから。………すごく嬉しい」

※主人公「名前呼んだくらいで大袈裟——」

「ううん、嬉しいよ。だってほら、僕の胸触って？
僕もこんなにドキドキしてる」

「誰にも奪われたくないって思ったのは、君が初めてなんだ。
どうして君にここまで執着するのか、やっとわかった。
僕、君のことがたまらなく好きみたいだ……」

※主人公「えっ!？」

「また君と一緒に笑えるように……
そばにいてくれないかな？」

「…もしかして、覚えてない？」

「ああ、ごめんね。こっちの話……
君は何も振り返らなくていい。心配しなくていいからね。
愛してるよ」